

島根県邑智郡石見町中野仮屋銅鐸出土地の調査

田中義昭*・三宅博士**

The excavation of the place of Dōtaku
from Nakanokariya, Iwami-cho, Ōchi-gun, Shimane

Yoshiaki TANAKA and Hiroshi MIYAKE

I 調査に到る経緯

島根県簸川郡斐川町荒神谷遺跡における弥生青銅器の大量発見が投げ掛けた考古学的な地域研究の課題がすこぶる大きく、かつ重いものであることは爾来この遺跡と出土品に関する研究の展開状況に照して明かであろう。現段階にあつては遺跡と青銅器群それ自体の入念で微細な検討が課題解明の前進にとってなによりも必要であることはいうまでもないが、一方山陰地方を中心とする弥生時代の青銅器と出土遺跡についても改めて目を向けて、これを仔細に再検討し、荒神谷遺跡の諸事実との対比的研究を試みることも肝要かつ有意義なことと考える。ここに開陳する島根県邑智郡石見町中野字仮屋銅鐸出土地の調査は、そうした研究状況への対応の試みである。

中野仮屋銅鐸の発見は1914（大正3）年に遡る。当時中野仮屋の住人椿源六氏が所有地開墾の折2個の銅鐸（1号・流水文鐸、2号・袈裟襷文鐸）を掘り当てた。その時の状況は梅原末治博士の大著『銅鐸の研究』に簡単に

紹介されている。件の銅鐸は東京国立博物館の所蔵となって現在に到っているが、当の椿家には銅鐸の鱗の一部と見られる青銅器片2個が保管されており、それらは現存2個の銅鐸とは別物の破片である可能性が数人の研究者によって指摘されていた。つまり「第3の銅鐸」の存在が示唆されていたのである。

かねてよりわれわれは、この「第3の銅鐸」問題に強い関心を抱き、また銅鐸出土地が特定できて、埋置に関連する遺構の良好な残存が予想される中野仮屋遺跡の発掘調査に手を着けることにした。

中野仮屋遺跡が所在する於保地盆地は、中国山地を横断して北流する江川流域に属し、古くから陰陽交流の要地として闊達な地域文化の発達が見られるところである。これまでに先土器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安各時代の遺跡が多数確認され、中・近世の遺跡も少なからず発見されている。とりわけ弥生時代以降の遺跡は濃密に分布し、中山古墳群や前近代を主とする製鉄遺跡等地域色豊かな注目すべき遺跡もある。中野仮屋遺跡の調査は、こうした於保地盆地における地域史の展開状況の解明に当然主たる視座を置くものである。

* 島根大学考古学研究室

** 島根県教育文化財団学芸主事

この調査は石見町教育委員会、石見町古里を探る会、島根大学の三者の共同で実施したが、宿泊等については地元中野北区自治会の全面的な援助を受けたことを明記して、感謝したい。調査期間は1989年8月1日より8月11日までの11日間にわたった。

II 銅鐸の発見から調査まで

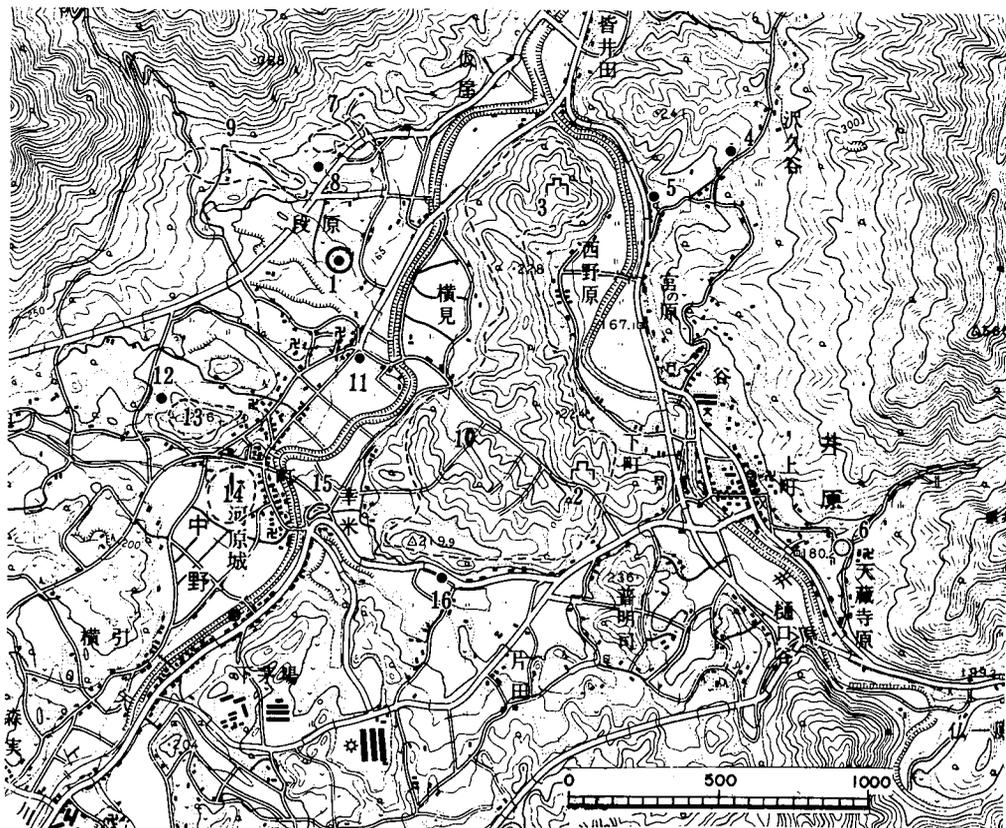
旧称「石見国邑智郡中野村大字仮屋4133番地」、現在の島根県邑智郡石見町中野字仮屋4133地番（通称コバンバヤシ、出土地点は森

安）で流水文銅鐸と袈裟襷文銅鐸が地元の椿源六氏によって発見されたのは1914(大正3)年9月9日のことであった。¹⁾

その後この銅鐸は同年11月7日遺失物法に基づき川本警察署へ提出され、翌年7月14日²⁾に東京帝室博物館が島根県から購入するかたちで同館の収蔵品となっている。³⁾

銅鐸発見の経緯について刊行されたものとしては梅原末治氏の『銅鐸の研究』⁴⁾がもっとも早く、しかも詳しい。

それによれば「是等二個の鐸の出土状態に就いては、発掘當時の地方廳の報告には単に



第1図 中野仮屋遺跡と周辺の遺跡

1. 中野仮屋遺跡 (◎)
2. 平城跡 (中世)
3. 積光城跡 (中世)
4. 庄塚古墳
5. 岩風呂遺跡 (弥生)
6. 天蔵寺原遺跡 (古墳)
7. 仮屋古墳群
8. 田の迫原遺跡 (古墳)
9. 反原古墳群
10. 中山古墳群 (破線内)
11. 池の尻遺跡 (古代)
12. 風呂ヶ谷遺跡 (古墳)
13. 賀茂山古墳群
14. 余勢の原遺跡 (弥生・古墳・古代)
15. 和泉原遺跡 (弥生)
16. 片田遺跡 (弥生)

「畑地中より出土」とあるのみでこれを詳らかにするを得ない(後藤守一氏に據る)。中野は江川上流の山地である。発見者たる椿源六翁の報ずる處に従うと、出土地は高い山の下に発達した高台の一つであって、西に緩やかな傾斜を示して居り、該臺地の上辺の松林中に発見者の住宅がある。鐸出土の局部は発見者の家から西方の畑地の一隅であって里道より二間余りの處、該部分は殆んど平坦に近いが臺地の麓を通ずる浜田街道からは百尺内外高く眺望がよい。」「右の畑は今から三十餘年前に開墾したと云うが鐸の出土は大正三年の事に属し、畑の表面から二尺餘の深さに二個重接して西南から東北を主軸として横たわっていたとのことである。然し和田千吉氏が出土の當時取調べられたと云う記載に依ると発掘地の畑地表は黒褐色の土質下五六寸の下は眞砂なる堅き土質にして、鐸は約七寸位の下に眞砂土に埋没し、眞砂を覆ひありしものにて周圍に何物もなし。銅鐸は鈕を西方に底部を東に向け、横に少しく斜に二個相並び鈕の

方少しく高かりしと云ふ。

とあって、前者とは少しく様子が違ふ。ただし前の重接とあるのが相並んだものの接したと云ふのであれば後者の記載とも合致するわけであるがいま明でない。並び記して置く。」と記されている。

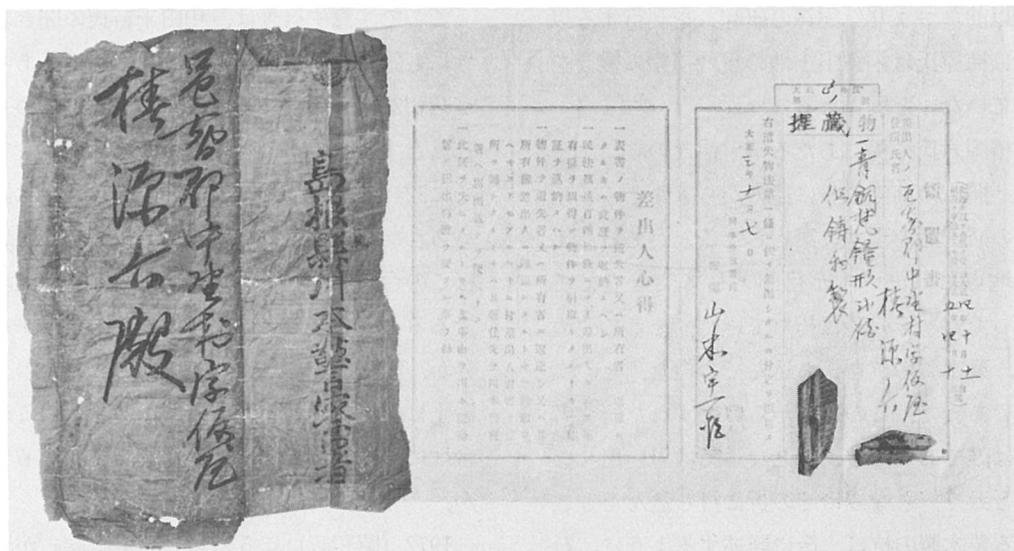
前述した引用文は現在となつては確認しえない重要な点が多い。この文章は内容に即して大きく四つに分けることができるので、順次A～Dとして検討を試みることにしたい。

Aは冒頭の「是等二個の鐸の……詳にするを得ない(後藤守一氏に據る).」とした箇所である。

Bは中ほどの「中野は江川上流の……横はっていたとのことである。」とした箇所である。

Cは後半の「然し和田千吉氏が……と云ふ。」とする部分である。

Dは末尾の「とあって……並び記して置く。」とする部分である。以上区分したものの内容は、Aとしたものには文末に後藤氏から



第2図 領 置 書

の情報であることが記されている。文中の「地方廳の報告」とあるのは大正4年、東京帝室博物館が2個の銅鐸を購入する折に島根県から提出させた添付書類であろうと想像される。

Bは比較的長い文であるが、疑問が生じるのは先のAの文末に「(後藤一氏に據る).」とあって句点まで付されている点である。この点のみからするとAとBの文は一連のものではないような印象を受ける。しかしBの内容はAを補足しているようにも感じられる。内容は具体的で、現地を踏査し、椿源六氏と面談した可能性のある文である。

Cは和田氏の取調書の引用であって、比較的詳細に記され、Bと対を成すものである。

Dは梅原氏自身の文で、A～Cの解説とでも云うべき内容である。梅原氏は引用文の前半を前者、Cを後者と記して、両者を対比するかたちとしている。このことからすると、Aは末尾に句点はあるものの、Bと一連のもので後藤氏の情報としたほうが妥当と考えられる。

A～Dの内容から推す限り1927(昭和2)年以前、つまり『銅鐸の研究』を刊行する以前に梅原氏は銅鐸出土地の現地視察の機会を得ていないと解される。

椿源六氏の孫にあたる椿忠信氏の談によると「開戦の前年ごろに遠方から来たという一人の研究者を現地に案内したことがある。出土地点には細い木が目印として突き立ててあったが、その時は朽ちていた。そこで改めて、栗木製の杭を打ち込んでおいた。」とのことであった。この遠方からおとずれた研究者とは誰であったか、今となっては思い出せないと云う。ちなみにその折に打ち込んだとされる栗木製の杭は、後に詳述するように、石見町教育委員会が立てた銅鐸出土地を示す標

柱直下でその基部が認められている。

ところでその後は第二次世界大戦となり、現物が地元になくともあって、出土地への究明もなされることはなかった。

この銅鐸出土地について改めて関心が向けられるのは戦後の郷土史研究が地域レベルで始められてからである。

1951(昭和26)年6月、県立矢上高等学校の郷土史研究グループの一員であった三宅弘氏は顧問の三上鎮博氏とともに銅鐸出土地の調査を試みている。三宅氏によれば銅鐸が出土した位置には目印として梅の木が植えられていた。その「耕作土30～35cmを掘ると木炭片と真砂土の他に土師器片が20～30片出土した。それを除くと小さなくぼみが認められた」という。

では昭和26年に調査を行なった位置が現在のどこにあたるのか、換言すれば今回調査を実施したところの石見町教育委員会の標柱が設けられている位置と同じか否かと云う問題となると約40年も前のことで判然としないう⁵⁾いう。

ここで注意すべきは、和田千吉氏の聞き書きにも銅鐸は真砂土中に埋没していたとあるが昭和26年の調査においても真砂土が認められたとする点である。今回の調査は標柱を中心に224㎡にわたって実施したが、真砂土は認められなかった。さらに地主の椿博氏によればこの台地はもともと真砂土を含まない土地であるとのことである。この点をどう解すべきか。和田千吉氏、三宅弘両氏と我々との真砂土に対する認識が違うのか、あるいはこの台地に局部的に真砂土が存在するのであろうか。

1972(昭和47)年5月に『石見町誌』が刊行されている。この時2個の銅鐸は『町誌』

の巻頭をカラー印刷で飾っている。この中で編集委員長であった三上鎮博氏は2個の銅鐸の説明に3ページを費している。内2ページは銅鐸の法量、形態、成分、残りの1ページを出土状態の記述にあてている。しかし出土状態の記述は梅原氏の『銅鐸の研究』の文がもととなっているため新しい事実は示されていない。ただし『銅鐸の研究』のBと分類した文中に「鐸出土の局部は発見者の家から西方の畑地の一隅であって……」と記されている部分に対して「私が聞いたところでは、ほぼ中央附近である。」としている。前者Bの文中に「一隅」とされているのが「地点」というような意味で使用されているとすれば、後者三上氏が記している「中央」と云う表現とさほど大きな違いはないように思われる。

ここで問題なのは三上氏等が昭和26年に行なった調査の成果が記されていない点にある。

それは三上氏が当時の調査結果にさほど重きを置いていなかったためか、あるいは実際の銅鐸出土地点ではないと判断した可能性が推定される。(この点については後に遺構の項の説明で触ることにしたい)

1976(昭和51)年8月、銅鐸出土地の東方の丘陵で花木団地造成に先がけ中山古墳群の調査が実施されていた。この見学も合せ山陰考古学研究集会在開催され、県内外合せて約30名の参加があった。第1日目の遺跡見学のコース中に銅鐸出土地も含まれていた。

、当時現地には標柱が立てられていたが、具体的にどこから出土したかと云う点は誰も

明確に認識することはできなかった。

1979(昭和53)年10月、県立八雲立つ風土記の丘資料館で特別展「古代の石見」が開催されたが、その資料収集の過程で銅鐸発見者の家系である椿家に銅鐸の破片とともに関係書類が保管されていることが明らかになった。この特別展に関係した横山純夫氏は東京国立博物館から特別展のため里帰りした2個の銅鐸と破片の接合を試みたが、接点を見つけることはできなかったと云う。

1984(昭和59)年～85(昭和60)年と相継いで簸川郡斐川町荒神谷遺跡から多量の弥生時代青銅器が出土した。これを機に1986(昭和61)年県立八雲立つ風土記の丘資料館では「鐸と剣と矛」展が企画され、再び中野銅鐸が里帰りした。破片検討の機会を得た筆者は接点は認められないものの文様、色調、厚み、幅等の観察から流水文銅鐸の鱗の一部であろうと判断した。

しかし接点のないことから椿家所蔵の破片が東京国立博物館所蔵の銅鐸とは別個体の可能性も十分考えられることであった。つまり椿源六氏の掘り残しの可能性が浮上することとなった。それに加え2個の銅鐸はいずれも鱗に欠損があることから、埋納坑内に破片が残されていることが考えられた。それがさほど攪乱を受けてないとすれば破片の分布位置から埋納状態の複元も可能と思われた。

そこでこれらの諸点を明らかにするために今回の調査が企画されることとなったのである。

III 調査の概要

1) 遺跡の立地と周辺の遺跡 於保地盆地は500~800mの山に囲まれた東西に細長く広がる盆地である。東西約7km, 南北約2kmの盆地の底地形は、山麓から低く延びる丘陵ないし台地状の部分と、盆地の中央を流れる矢上川の侵食によって形成された谷の部分からなっている。中野仮屋遺跡が立地する個所は、盆地北側に聳える向齒無山の山麓から南東に張り出した舌状台地の中央やや東縁よりにあたっている。(第1図)。

銅鐸が出土したと伝えられる地点付近は南東に向かって緩く傾斜する平地で、その広がり幅約100m, 長さ約200mを計測することができる。現在は殆ど荒蕪地となっているが、近年までは畑地として耕作されていたようである。台地の先端部は崖状をなして矢上川の沖積地に続く。台地と水田面の比高差は約20mで、銅鐸出土地付近は矢上川の岸辺から十分視界に収めることができる。なお台地先端部一帯では土師器や須恵器の散布が認められている。

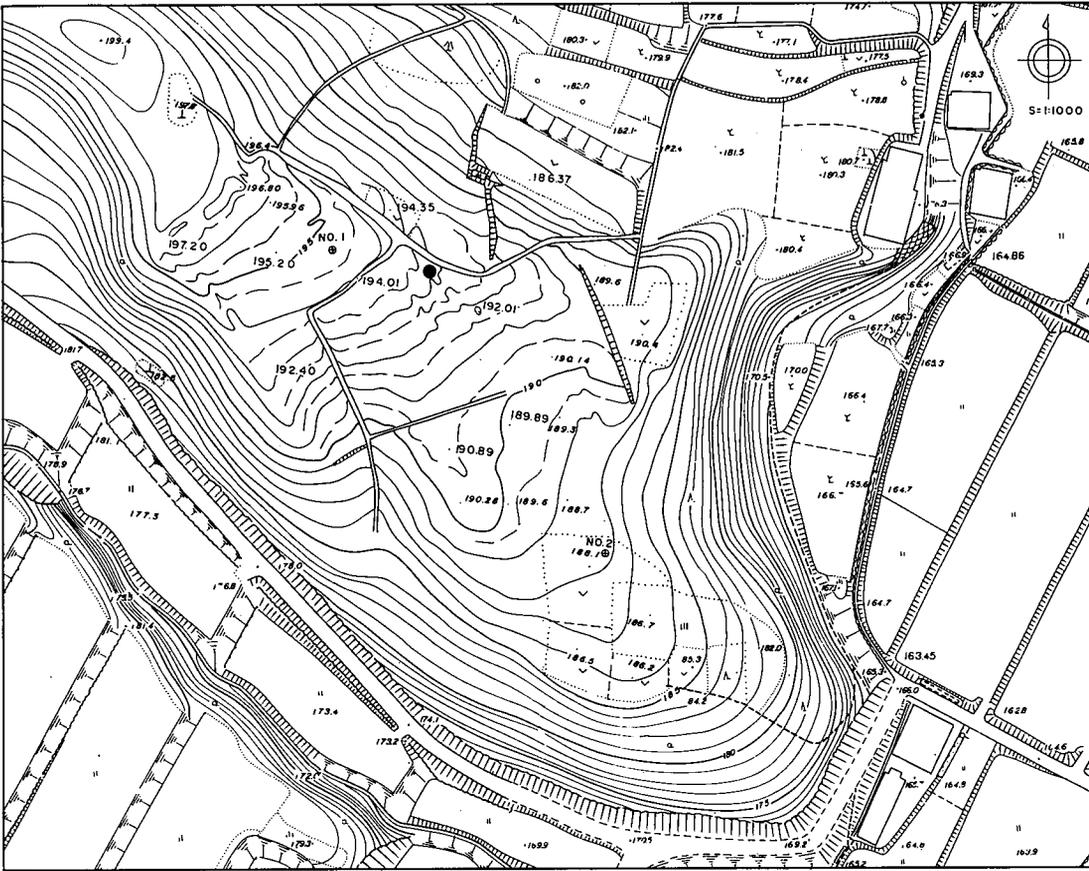
於保地盆地の各所には多数の遺跡の存在が知られているが⁸⁾、銅鐸との関連で弥生時代の遺跡、あるいは後続の古墳時代の主要な遺跡を取り上げてみると、中野仮屋遺跡より1km南西の矢上川左岸の低平地には余勢の原遺跡がある。町営グラウンド造成工事に際して大量の弥生土器、土師器が出土した。特に注意を引くことは、弥生後期前半の土器量が多いことと特殊壺の一類型と見られる赤色顔料を塗布した土器片が認められたことである⁹⁾。全体的な時期は弥生前期後半から古墳時代に及んでおり、土器の散布範囲から考えても、ここに盆地内に形成された農耕集団群の拠点とな

る優勢な集落が存在した可能性が高い。また盆地のほぼ中央部の森実では、やはり矢上川の左岸の台地縁に弥生後期のものと思われる「V」字溝の一部が発見されている¹⁰⁾。弥生時代の集落に関する調査・研究はきわめて不十分ではあるが、以上の他のいくつかの遺跡の立地状況から推して盆地各所に存在する矢上川兩岸の支谷口付近には大小の弥生集落が営まれていたことを想定するに難くない。中野仮屋の銅鐸は、それら諸集落の共同の祭器であったと推定される。

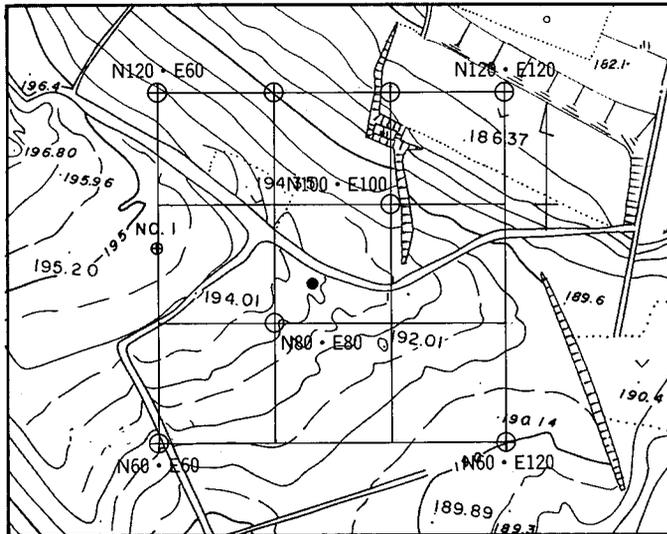
弥生時代終末期から古墳時代にかけて100基以上の墳墓が次々に造営された中山古墳群は矢上川の右岸、中野仮屋遺跡の対岸の丘陵上に位置している。大半の墳墓は低墳丘墓ないし無墳丘の区画墓と見られるが、中にはB-1号墳のような前方後方墳、あるいはD-16号・前方後円墳(全長約23m)等が発見されている¹¹⁾。前者からは方形板葺短甲が出土しており、石見地方としては最古の古墳の一つとしてその出現の背景や被葬者の性格が問題となろう。大摺みには、おそらく弥生時代から引き続いて盆地内に優勢を誇っていた中核的な農耕集団の累代的な墳墓群と考えられるのである。

盆地内に多数存在する製鉄遺跡の多くは近世の所産とみられるが、近隣の瑞穂町市木今佐屋山遺跡において古墳時代後期に属する製鉄遺構が検出されたことは、於保地盆地にも将来古代にさかのぼる製鉄遺跡が検出される可能性が大きいことを示唆する¹²⁾。また矢上川の兩岸には古代集落遺跡の濃密な分布が知られてきたことからしても、今後新たな地域史研究の積極的な開拓と推進が期待されるところである。

2) 発掘調査の経過 発掘調査の着手日は



第3図-1 中野仮屋(銅鐸出土地)遺跡地形図(●印銅鐸出土地)



第3図-2 中野仮屋遺跡発掘区(1区画20×20m, ●印銅鐸出土地)



第4図 埋納坑SK01と埋土の断面

1989年8月1日である。すでに7月下旬故里を探索の会、地元中野北区自治会の人達により銅鐸出土地点を中心に100m×100mの範囲の草刈りが実施され、またワールド航測コンサルタント株式会社による基準杭の設置と発掘区の線引きが行われた。基準杭の座標はX=121171.80, Y=+27523.71, 標高=194.63mである。この基準杭を通る南北ラインと東西ラインを設定して、それぞれ20m毎に交点を置いて大区画(400m²)をつくり、さらにその内部を4m平方に区切って小区画のグリッドを組んだ。大区画は将来遺跡の全域を調査する構想を考慮して台地全体に設け、台地の西南端から若い番号を振っていった。この区画法に従うと、例えば銅鐸出土地の標識が立つ個所はN88・E84区に含まれることになる。

今回の調査で発掘したグリッドは14区画、総面積は224m²になる。調査区の名称を列記すると次の通りである。N80列では、N80・E80, N80・E84, N80・E88, N80・E94。N84列では、N84・E84, N84・E88, N84・E92。N88列では、N88・E80, N88・E84, N88・E88, N88・E92, N88・E96。N92列では、N92・E80, N92・E84となる。このような調査区の掘り進め方は、銅鐸出土地の標識があるN88・E84区付近の微地形が、

この区を含めてN84ラインにほぼ沿う形で低い尾根状をなしており、これを脊に全体の地形が北東、南西側にゆっくり傾斜していることから、まずはN88・E84区と似たような地形を探る意味で採用したものである。つまり銅鐸は中野仮屋台地東縁に沿う低い尾根状の高まり部分に埋納されていたと思われ、その尾根状の隆起部分を中心に調査を進めたいということになる。(第2-1図, 第2-2図)。

調査の結果、遺構もしくは遺構の可能性が考えられる個所が検出されたのはN80・E84, N88・E84, N92・E84の3区画であった。その他のグリッドでは須恵器、鉄片等の若干の遺物を検出したが、遺構にともなうものはなく、いずれも表土層もしくはその下部の攪乱層からの出土であった。これらはかつてこの台地上に古墳が存在したことを推定させる遺物といえよう。

3) 遺跡の層序と遺構の検出状況 1914年の銅鐸発見時の状況を確認すること、あるいは「第3の銅鐸」の可能性を探るにしても遺跡がどの程度保全されているかで成果が左右される。この問題を東西、南北の土層の堆積状態で検討してみた。まず東西のセクションで土層の堆積を比較的良好な状態で観察できるのは、N88・E80～N88・E88間のN88ライ



第5図 SK03



第6図 石鑿出土状態

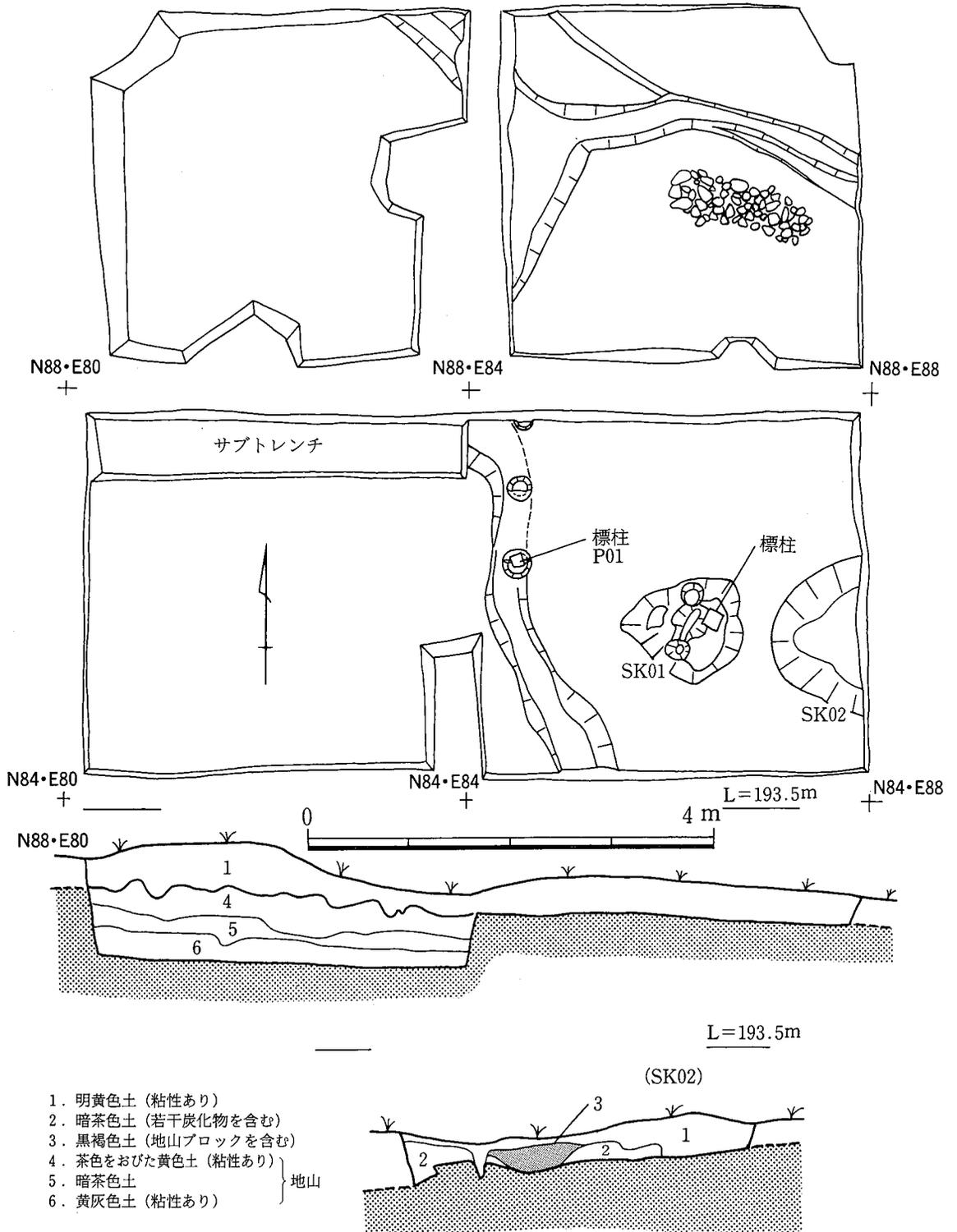
ンとN80・E80～N80・E100間のN80ラインである。N88ラインでは上部から第1層＝褐色ないし暗黄褐色土（表土、炭化物の小粒を含む。1～3層に細分）・厚さ15～40cm、第4層＝黄茶色（表土の影響をうけて黄色土が変化したもの、木の根が侵入）・厚さ20～40cmで、第1層との境は凹凸がある。第5層＝暗茶色（基盤層の黄色土が変化したもの）・厚さ8～20cm、第6層＝黄灰色（基盤の堅い土層）。第4層以下は粘土質で花崗岩系の岩盤が風化した土層と考えられる。このような層序はN80ラインにおいても基本的には同様に看取されたが、このラインでは樹木が多いため第4層までは不規則な堆積個所が随所で見られた。南北方向のセクションとしてはE80ラインが良好な堆積状況を示していたが、その層序はN88ラインと同じである。なお第4層以下からは遺物はまったく出土していない。（第7図）。

次に遺構もしくは遺構の可能性のある個所が検出された3つの区画について、それらの検出状況を記しておこう。まずN80・E88区の東よりからN80・N88区の西壁際にかけて、第2層に切り込む形でほぼ東西方向に長軸を置く不整形な楕円様の土坑が発見されている。大きさはE-W=180cm、N-S=90cm、深さ

が60cmを測る。底の形状は、長軸方向では東壁が垂直的に掘込まれ、中央の最深部に向かって少し傾斜する。最深部から西壁際までは底面が緩く上昇して高さ25cmの西壁下端に達している。短軸の断面はV字形に近い。坑の東端近くの北壁上面には幼児の頭大の石があり、それに近接して石鑿が1個検出された。土坑内部には上部から灰褐色土、黒褐色土、黄色ブロック混じりの黒褐色土がレンズ状に堆積していた。SK03と命名するが、性格は不明である。（第5図、第6図）。

銅鐸出土地の標識が立てられていたN88・E84区では、発掘区のほぼ中央に浅い皿状の土坑が検出された。検出面は第4層上面（第7図）であるが、この面はいわば地山の現状での最上面であって、この上部に堆積する第1層（表土）との境が人為や草木の根の攪乱により形成された際の境界面でもある。したがって銅鐸を埋置するための坑の掘削面は、発見者等の言辞からしてもおそらく現在の地表面近くにあったと考えるべきであろう。坑底には2個のピットと一条の細い溝が北東－南西方向に走っている。坑の埋土は複雑な断面を示しているが、これは4度の標柱の立て替えによる攪乱が原因とみられる。埋土中からは米粒大の青銅器片16点とやや大きな鏃部分の破片1個が採集された。（第7、8、9図）。

これらの事実からすると、上記の土坑が銅鐸埋置時の坑そっくりそのままとは断定できないにしても、この個所に2個の銅鐸が埋められていたことはまず疑いないところといってよいであろう。土坑の名称はSK01とする。なおSK01の東約30cmのところにも皿状の土坑が検出された。SK02とする。3分の1以上はN88・E88～N84・E88のセクションベルトに含まれているが、その内部の埋土の状



第7図 SK01, SK02実測図

態からして比較的近年の掘削によるものと思われる。同様にN88・E84区の西側に存在する南北方向の小溝も近年に掘られたものである。

N92・E84区で検出された帯状の石組も一種の遺構と思われる。挙大の碎石を並べたものであるが、北側を走る溝と対になる小径の舗装施設の可能性が大きい。やはり近年に敷かれたものと判断される。(第7図)。

IV 遺構と遺物

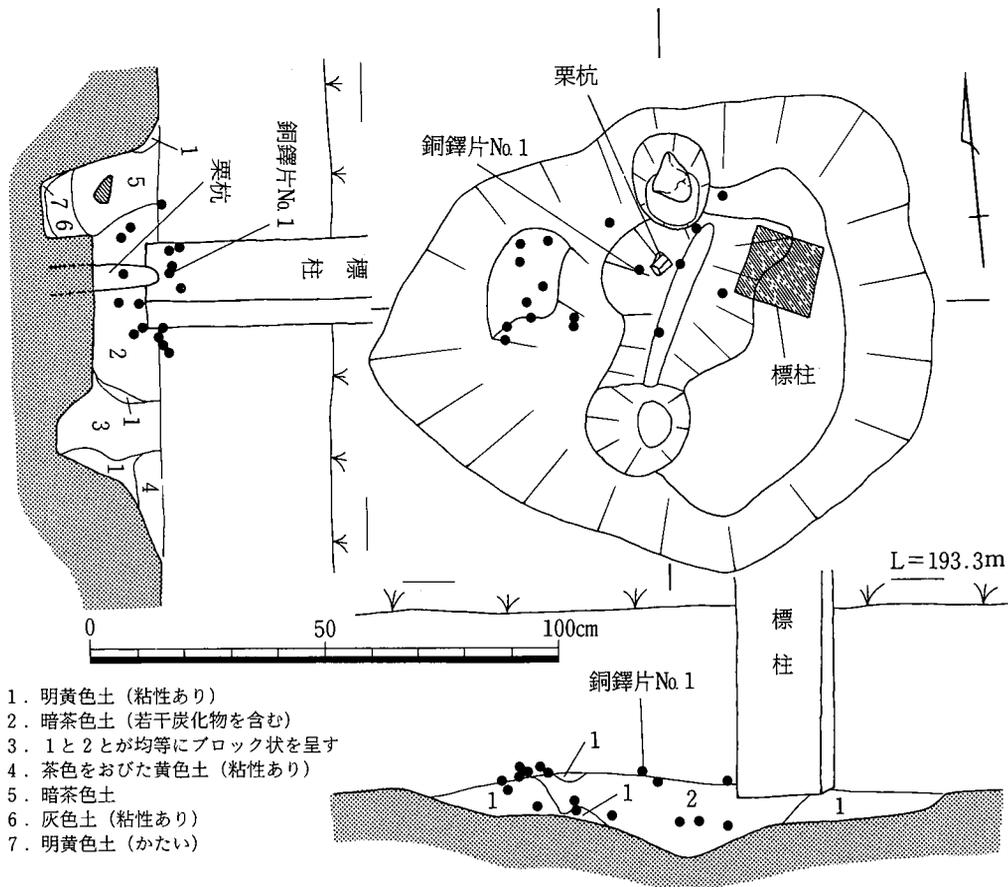
1) SK01 SK01としたのはN86・E86地

点の表土下40cmで検出した土坑で、石見町教育委員会の「銅鐸出土地」を表示する標柱掘方とは重複関係にある。

SK01は粘質の黄茶色土に掘り込まれた平面楕円形を呈す、長径121cm、短径100cm、断面は皿形を呈し中央部分で深さ14cmを測る。

中央底面には短径中軸線(国土座表軸に沿う南北線)よりやや東方へふれる溝状のくぼみが認められる。この溝状のくぼみは幅4cmを測り南端は後述する円坑によって損われ、全体を知ることはできないが、残存長は36cmとなっている。

全体に攪乱が著しく、南北中軸の両端には



第8図 SK01内銅鐸片出土分布図

上面から掘り込まれた径10cmを測る円坑が底面を貫いている。さらにSK01の中央やや東よりには前述したように標柱の基部が認められる。また中央から若干北よりに3cm角の杭の基部が認められた。このように少なくとも4回にわたって、外部から何らかの力が及んだことが知られる。

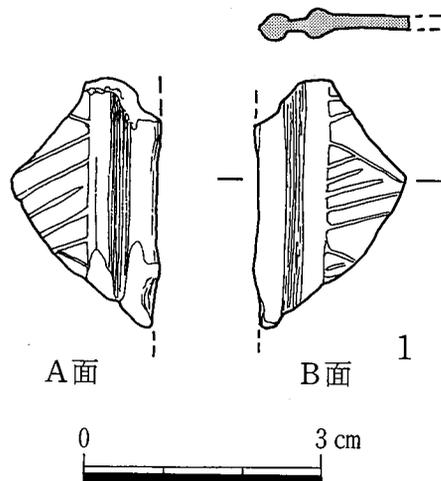
これらはいずれも銅鐸出土地の表示にかかわる行為によるものと推定され、中央近くの角杭は「銅鐸の発見から調査まで」の文中で記した如く、椿忠信氏が打ち込んだものである。

このSK01はかなり攪乱を受けてはいるものの、その推積土中及び上面で米粒大の青銅器片17点を採集した。小片とは云え出土密度の高さ及び、椿忠信氏が打ち込んだ杭を確認したことから、ここが1914年に銅鐸が発見された地点と判断された。ただしこの不整形なSK01が銅鐸が埋納されていた当初のままであるか否かは即断しがたいものであった。

つまりSK01が1914年の椿源六氏による掘削痕である可能性も捨て切れないからであって、この件については後ほど検討を加えることにしたい。いずれにせよ2個の銅鐸は現地地表から40cm以内の深さに埋められていたことになる。

銅鐸片No.1 SK01内の推積土中及び上面で認められた破片のうちNo.1は文様がわかる唯一のものである。略三角形を呈す鱗部の破片で3.06gを測る。縁辺には2条の突線が平行して走る。内側の突線を底辺とする鋸歯文がA、B両面に認められる。頂点が内向する鋸歯文内には4本の右上りの斜線が施されている。

SK02 N88・E88～N84・E88間のセクションベルトに接するかたちで検出した土坑であ



第9図 銅鐸片No.1実測図

る。平面小判形を呈し、長径180cm以上、短径160cm、深さ40cmを測る。掘込みは表土直下からなされ、内部の黒褐色土中には地山の黄茶色ブロックが混在する状態であった。(第7図土層図トーン表示部分)。このように地山ブロックが混在する例は他に認められなかった。以上のような土層の乱れは地山まで一気に掘り上げた土をさほどの時間を置かずに埋め戻したことを示しており、銅鐸出土地点であるSK01にきわめて近いことから1951年の調査にかかわる痕跡の可能性が大きいと考えられた。

P01 SK01の西側2mに位置する柱穴状の落ち込みである。中には10cm角のタールを塗布した標柱根が残存する。この落ち込みは半截しただけで底面まで掘っていないが、柱根はかなり深く埋め込まれているらしく内部の土は腐植土でほとんどしまりがないにもかかわらず¹³⁾抜けそうにない。

SK03 N80・E88調査区内で検出した土坑である。平面小判形を呈し、主軸の方位はほぼ東西方向を示す。長径180cm、短径90cm、検

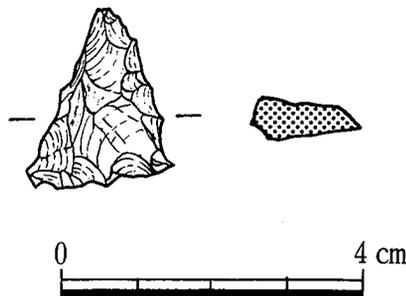
出面からの深さ60cmを測り、底部の西側は不整形な階段状を呈し、壁との境は不明瞭となっている。掘込みは表土直下からなされ、内部の土にしまりは認められなかった。それらの点からSK03はさほど古い時期のものではないと考えられる。

2) 出土遺物 今回の調査で得られた遺物は、大別して、SK01に伴う遺物(銅鐸片)と各調査区表土除去作業中に出土した遺物とがある。ここでは後者について記すことにする。これらは表採資料に近く、完形に復しえるものは認められなかったので、ごく簡単にふれることにしたい。

石鏃 N80・E88区第1層最下部から出土したもので、二等辺三角形を呈する安山岩製の打製石鏃である。全長2.4cmを測り、全体に不規則な押圧剝離が認められる。弥生期のものであろうか。(第10図)。

第11図1はN72・E170区第2層から出土した須恵器の甕と推定される破片である。外面には平行線叩きの後カキ目が施されている。内面には同芯円の当具痕が認められ、内外面とも淡灰色を示し焼成は良好である。

2はN80・E92区で採集された須恵器の坏



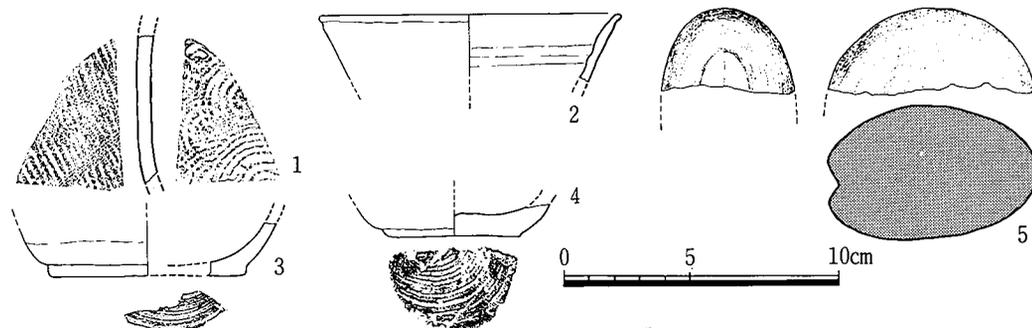
第10図 石鏃実測図

である。体部は逆「八」の字形を呈すもので、淡黄色を示し、焼成は良好である。

3, 4はいずれもN80・E88区で採集されたもので、坏の底部と考えられる。ともに一種の「ベタ」高台を呈す。ただし、前者が灰色で焼成は良好であるのに対し後者は土師質となっている。

5は磨石の約1/2が欠損したものである。外面は風化も著しいが、部分的に使用時の擦痕が認められる。一方の端部に「V」字形のくぼみが見られる。

これらは1が6世紀後半、2~4が9~10世紀のものとして推定される。



第11図 中野仮屋遺跡出土遺物

V 中野仮屋銅鐸をめぐる諸問題

これまで邑智郡石見町中野字仮屋における銅鐸発見の経緯に今回の調査の報告を交えながら記してきた。

ここでは椿家に大正3年から保管されていた破片(以下椿家資料No.1, No.2と呼ぶ)及び今回の調査で得られた破片と東京国立博物館所蔵銅鐸との関係、銅鐸埋納状態の推定、さらに中野仮屋出土銅鐸の意義の順で記すことにしたい。

1) 椿家資料と東京国立博物館所蔵銅鐸の関係

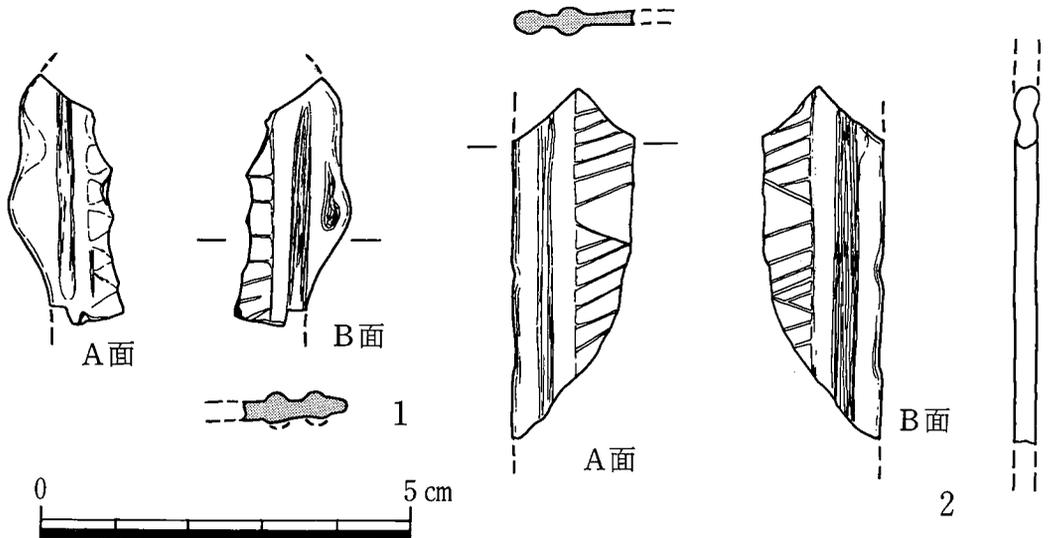
椿家に保管されていた破片は2点あってこれが大正3年に椿源六氏によって発見されたものの一部であることは『領置書』と照合しても明かである。No.1(第12図1)は双頭飾耳の一部と推定されるもので3.9gを測り、縦方向に2条の突線が縁どりがなされている。B面では先の突線に接して横方向に細い突線が4条認められる。最下方の突線が前述したも

のより極端に左下りとなることからこれが鋸歯文の裾の一隅に相当すると考えられる。A面はかなり磨滅しており、横方向に走る突線は不明瞭となっている。

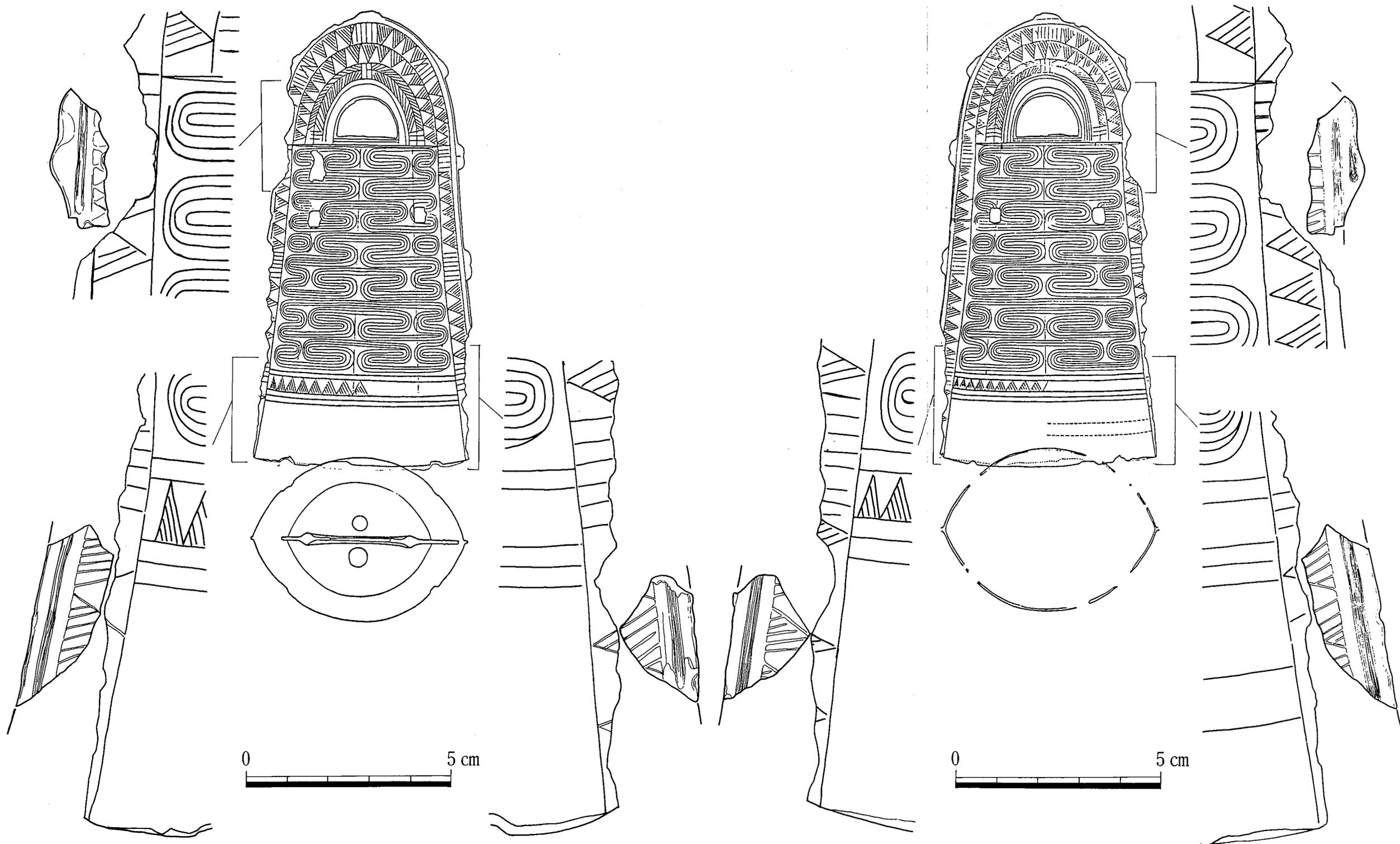
椿家資料No.2(第12図2)は6.05gを測るもので、縁辺には2条の突線が平行して走り、内側の突線に接するかたちで鋸歯文が認められる。内向の鋸歯文内には4~5本の斜線が施されている。斜線は両面とも右上りとなっている。

この他、今回出土した破片も含めると文様の認められるものは計3点となる。これらはいずれも鱗の部分と推定され2条の突線で縁どりがなされるとともに鋸歯文が認められる。このことは2個のうち的一方、流水文銅鐸の文様構成要素と共通する。

そこで内向する鋸歯文の斜辺と鱗幅を念頭におき接合を試みることにした。いずれも接点は認められなかったものの一応第13図に示した部分であろうと判断された。ただし椿家資料No.2 A面と東京国立博物館所蔵の流水紋



第12図 椿家資料No.1, 2実測図



第13図 中野仮屋第1号流水文鐸と破片接合図

銅鐸のA面の文様には細かい点でずれが認められる。つまり、椿家資料の鋸歯文のうち上から2段目の右下りとなる1辺と本体との間に突線1本分の食違いがある、この食違いを椿家資料No.2と東京国立博物館所蔵流水紋銅鐸とを別個体と考えるかあるいは突線が元来やや曲っていたとするかは評価の分かれるところであろう。¹⁴⁾

2) 銅鐸埋納状態の推定

中野仮屋銅鐸の埋納に関する手がかりは『銅鐸の研究』に引用された後藤、和田両氏の聞きとりが唯一のものとなっている。しかし前者は「畑の表面から二尺餘の深さ」から出土したとするが、後者は「約七寸位下の真砂土」中から出土したとしている。この数値はかなり異ってはいるが、二尺とは地表から埋納坑底面までの距離、七寸とは地表から銅鐸上端あるいは被覆していた真砂土までの距離であった可能性が考えられる。銅鐸埋納の例をみると身を横たえながら鱗を立てることがかなり知られている。¹⁵⁾ 中野仮屋銅鐸の場合両者とも底部長径約25cm、短径約16cmを測るから先の埋納例に従ったものであったと仮定すれば、表記された数値はいずれも事実に近いものであって、その差は異なる位置からの距離を示したことによって生じたものと推定される。

ところで以前にも触れた真砂土の件であるが、埋納地一帯で全く存在していない土で、銅鐸を被覆する例は若干ながら知られているので、和田氏の記述が誤謬であるとは云いがたく、検討を要する問題といえる。

さて今回検出したSK01が銅鐸出土地点であることはこれまで記してきたとおりであるが、埋納坑と称するには、大正3年の掘削痕である可能性も大きく躊躇せざるをえない。

ただし、SK01の規模は2個の銅鐸を埋納するのに十分な大きさであるとともに中央底面に短径中軸線よりやや東方へ振れる溝状のくぼみが認められる。『銅鐸の研究』中の後藤氏の情報とみられる引用文中に銅鐸が「二個重接して西南から東北を主軸として横たわっていた」とする方位に類似しており、あるいはこの部分に鱗がはまり込んでいた可能性も考慮される。

3) 中野仮屋銅鐸と於保地盆地の農耕社会

中野仮屋銅鐸が邑智郡石見町中野仮屋4133番地、通称コバンバヤシの地から出土したことはもはや疑う余地のない事実である。このことの確認に立って扁平鈕式6区袈裟襷文と突線鈕I式流水文の2個の銅鐸が盆地内に形成された農耕社会においてどのような存在意義を有していたのかに論及することが地域史の考察にとって必要となる。

於保地盆地における農耕社会の成立と初期の発展についてはIII章で概要を述べたところであるが、調査・研究のきわめて不十分な現状にあってはこれら銅鐸の保有と祭祀の在り方に関わる問題を盆地内に生成する地域の農耕集団の諸側面に即して語ることはまことに困難という他はない。ただ若干の推察と予測が許されるならば、少なくとも以下のように想定することは可能であろうと思う。

中野仮屋銅鐸との関連で注目される集落址としては、まず余勢の原遺跡を挙げるべきであろう。この遺跡は弥生時代前期から古墳時代を経て奈良・平安時代に到るまで、ほぼ間断なく営まれつづけた集落址である。こうした居住の連続性に加えて遺物が広範囲に散布するということから推定される集落規模の大きさ、さらに特殊壺の出土から考えられる集落の特異性等を考慮するならば、余勢の原遺

跡は矢上川流域に展開する弥生諸集落の中心的存在であったとみることができる。また採集された土器片の中で弥生後期前半のものが量的に目立っていることも注意される事実であろう。

ところで余勢の原遺跡の対岸で発見された和泉原遺跡にも注目したい。¹⁶⁾この遺跡は矢上川と右岸の深い支谷口との間に位置しており、弥生中期後半から後期中葉の土器が出土している。おそらく余勢の原遺跡と対をなす形で存在した有力な集落遺跡と推定される。つまり余勢の原、和泉原の両遺跡が一体となって於保地盆地の拠点的な地域集団を構成していた態を想定しておきたいと思うのである。そしてこれらの弥生集落群の発展のピークが弥生中期後半から後期にかけてであったことも、土器の発見状態等から推定可能ではなかろうか。扁平鈕式と突線鈕Ⅰ式銅鐸が盆地内の拠点集落に導入・保有され、それが地域集団全体の統一的宗儀の祭器として使用されたのはまさにこの地域社会発展のピーク時に対応すると考えられる。

問題はこれらの銅鐸の終焉の時期である。埋納されて二度と取り出されることがなくなったのは、何時かという問題だ。多くの銅鐸埋納例がそうであるように、中野仮屋銅鐸についても、すでに述べたとおり最終埋置の時期を示す資料は皆無である。そこでこの問題も間接的な資料によって類推を試みることになるのであるが、まずは突線鈕Ⅰ式のⅠ号鐸は現状において山陰地方では最終段階の銅鐸という点が注意されよう。¹⁷⁾中国地方全体についてみると岡山県吉備郡真備町妹蓮池尻出土銅鐸のように突線鈕Ⅱ式に属する例もある。しかしこれより新しい型式の銅鐸の出土は知られていない。岩永省三氏は「見る銅鐸」や

広形銅矛が普及する段階に瀬戸内海沿地方と日本海沿岸地方では「いち早く青銅器全般がなくなる」とし、このことを墳丘墓の発達と表裏をなす現象として注目している。¹⁸⁾

中国地方の山間部でも弥生中期後葉には四隅突出型墳丘墓が出現し、後期後半になると日本海沿岸に大形のもの点々と築造されるようになる。石見地方の沿岸部では江津市波来浜遺跡で中期後葉頃から墳丘斜面に貼石を巡らす墳丘墓が造営されているし、邑智郡瑞穂町では後期前葉に四隅突出型の順庵原Ⅰ号墳丘墓が現われ、於保地盆地では中野仮屋台地の対岸の中山丘陵上に後期後葉ころから古墳時代初期にかけて墳丘墓や無墳丘の区画墓が造営されたとの想定もできる。¹⁹⁾こうした動向に加えて、余勢の原遺跡において特殊壺が発見されていることをも考慮すれば、この盆地でも少なくとも後期後半初期には墳丘墓が築造され始めた可能性はあるとみたい。つまり岩永氏の指摘は中国山地にも該当するものであり、当地方における銅鐸祭祀の終焉は、おそらく後期前半のある時点で想定して大過なしと考えるのである。換言すれば、弥生中期後半から後期にかけて発展のピークを迎えた於保地盆地の農耕社会ではその繁栄の過程で銅鐸祭祀を止揚しつつ首長グループの墳墓として墳丘墓の造営が開始されたとみられる。

石見地方では浜田市上府町城山で2個の扁平鈕式銅鐸が出土している。以前より上府出土銅鐸と中野仮屋出土銅鐸をもって銅鐸分布圏の西界が画されていた。そのような認識は中、新段階の銅鐸圏については現状でも正当性をもっているといえる。このことは弥生中期後半頃からの江川流域における農耕社会の発展を背景として銅鐸分布圏がいつその拡大をみせた結果とも理解されよう。同時に土

器の地域色に示されるように、江川流域は後期前葉にはいわゆる山陰系土器の分布圏の一角を構成するが、他方では備後北部・芸芸東北方面との密接な交流をもっている様子が伺えるのである。²⁰⁾ こうした地域間交流の様相は弥生時代以降でも一貫して認められるところで、このことの地域的、歴史的意義を正しく解明することが今後の重要な課題となる。

あとがき

これまで中野仮屋銅鐸にまつわる様々な問題を追い求めて、その解明を試みることは山陰地方の原始・古代史に関心をもつ者が担う重要な研究課題であったといってよい。また今日地方農村の存亡が問題になっている時、その活発な再生を願う人々にとっても地域史の学習を通して地域を再認識し、そのことと併せて明日の地域社会を創造する事業に取り組むことの重要性が説かれてきた。こうして中野仮屋銅鐸を巡る「謎」は石見町の町民にとって地域史上の大きな関心事の一つとなっていた。今回の銅鐸出土地の調査はこの二つの流れが合流することによって実現したものである。

ここにその結果を報告し、併せて中野仮屋銅鐸を巡る若干の問題について論及したのであるが、本格的な課題究明の仕事はこれから始まるとしてよく、本文がよくその嚆矢となることを願う。

摺筆に当り下記の個人、団体から資料の提供と教示、あるいは各種の援助を賜った。ここに御芳名を挙げて感謝の意を表明する次第である。

個人：三木文雄氏、佐原真氏、井上洋一氏、本村豪章氏、平野芳英氏、松本岩雄氏、吉川

正氏、角田徳幸氏、松本潤氏、椿忠信氏、椿博氏、椿幸雄氏。

団体：石見町教育委員会、石見町古里を探索会、石見町中野北区自治会、石見町青年会、明日の会、島根大学1989年度博物館学実習生、島根県教育委員会中国横断道遺跡調査団。

本文は兼常磐、駅場春樹、藤田典幸、松川伸作、渡辺恒知氏等古里を探索会の会員諸氏との意見交換を参考にしながら田中義昭（I, III, V-3を執筆）、三宅博士（II, IV, V-1・2を執筆）が論述した。図版作成は三宅が担当し、遺物実測で島根大学考古学専攻生勝瀬利栄さんの手を煩わせた。記して感謝。
※ なお図版1, 2は島根県立八雲立つ風土記の丘図録より転載した。

註1) 銅鐸発見年月日については『島根県史』（1924（大正13）年）、『東京国立博物館図版目録・弥生遺物編（金属器）』（1981〔昭和56〕年）等すべてこの日付けとなっている。

2) 椿忠信氏宅所蔵の川本警察署長からの「領置書」による。

3) 『東京国立博物館図版目録・弥生遺物編（金属器）』1981年。

4) 梅原末治『銅鐸の研究』1927年、東京・大岡山書店。本書については1985年に木耳社から佐原真氏の解説を付した復刻版が刊行されている。

5) 1951（昭和26）年の調査には椿忠信氏は立会していないとのことである。氏によれば梅木は銅鐸出土地点とはかなり距離があるという。銅鐸出土地点とは異なる可能性が高い。

6) 『石見町誌』1972。

7) この書類と破片は門外不出のものであったらしく、『石見町誌』にも『続・邑智郡誌』（1972（昭和47）年）にもこの件に関しては触れられていない。

- 8) 石見町教育委員会編『石見町の遺跡』1983年。
- 9) 石見町教育委員会において余勢の原遺跡出土品を調査した際に実見。
- 10) 1990年10月に分布調査を行った際に確認。「V」字溝の埋土最上部に弥生後期の土器が包含されていた。
- 11) 石見町教育委員会編『中山古墳群発掘調査概報』1977年。D16号の前方後円墳は、1990年8月の調査で存在を確認した。
- 12) 角田徳幸「島根県今佐屋山遺跡の古墳時代製鉄遺構」(『たたら研究』30) 1989年。
- 13) 椿忠信、博両氏の談によれば、標柱を立てるようになったのは戦後のことであって、PO1は椿氏の証言によって立てたものでないという。この標柱が何時立てられたかは不明。
石見町教育委員会の松川伸作氏の調査によれば、委員会として標柱を設置したのは1968～69年、1978～79年の2回が確認できるとのことであった。
- 14) 井上洋一、平野芳英両氏は別個体の可能性を考えられている。特に井上氏は、徳島県国府町西矢野銅鐸(通称源田銅鐸)のうちの第3銅鐸は当初から破損品が埋納されたと推定している。西矢野の例の如く、第3番目の銅鐸を椿源六が見落すほど小さな破片となっていた可能性を考えられている。
- 今回の調査ではそれを補強するような資料の存在を認めることはできなかった。筆者等は椿家資料No.2は流水文銅鐸と同一のものと考えている。
- 15) 最近の調査例では島根県斐川町荒神谷遺跡、岡山市高塚遺跡(佐原真氏の教示による)、桜井市大福遺跡等が知られ、類例は多い。
- 16) 『石見町の遺跡』記載の「和泉原遺跡」の項には、弥生中期後葉から後期中葉の土器が図示されている。他に弥生前期後半の土器かと思われるものもあった。
- 17) 鳥取県八頭郡船岡町破岩から突線鈕式かと思われる銅鐸の出土が伝えられているが、詳細は不明。註4及び柳浦俊一「山陰地方の銅鐸—荒神谷遺跡を中心に—」(『島根考古学会誌』第4集) 1987年参照。
- 18) 岩永省三「国産青銅器・剣形祭器」(『弥生文化の研究6 道具と技術II』) 雄山閣、1986年。
- 19) 註11に同じ。無墳丘の区画墓と有墳丘の方形墓が併行して営まれたことも、既発見の墳墓の状態から推定できるかもしれない。
- 20) 池橋幹「弥生後期土器の地域色とその背景—中国地方東部を中心に—」(『考古学研究』127) 1985年。



図版1 1号流水文鐸



図版2 2号袈裟襷文鐸